

病理専門医部会会報

平成26年7月

== 委員長・支部挨拶 =====

病理専門医部会長に再び就任して

藤田保健衛生大学医学部病理診断科 黒田 誠

平成26年度から深山正久理事長のご高配により、病理専門医部会長を引き続き担当させていただくことになりました。平成24年7月の会報に現在までの大きな流れについて述べてありますので、確認していただけたら幸甚に存じ上げます。

この2年間で病理専門医制度をめぐる状況が大きく変わってまいりました。日本の専門医制度は、社団法人日本専門医制評価・認定機構が中立的第三者機関となるべく、国民から信頼され、広く認知された専門医制度の再構築の準備を進めてきましたが、これは本年5月に解散して新しく日本専門医機構が第三者機関として立ち上がりました。平成27年4月に医師免許を取得した方々からは初期臨床研修を2年間行った後に、日本専門医機構の制度の下で後期研修を行い、専門医試験の実施および資格の更新はすべて機構が実施することが決まりました。従いまして、日本病理学会といたしましては、この流れに乗って基本的診療18科および総合診療科と歩調をあわせいくことといたしました。

初期臨床研修につきましては、内容の大きな変更はなく、病理をローテートした場合には、死体解剖資格の申請に使用できる剖検の副執刀5体を認めることには変更ありません。将来を鑑み、できるだけ病理以外の幅広い知識を習得していただきたいと考えています。

その後の後期研修は、病理学会は現在まで4年制のプログラムを実施してきましたが、他の学会との整合性をとって、病理を選択し難くならないように、3年制のプログラムに変更する方向で、ワーキンググループを作って、円滑に移行できるように作業を進めている最中でございます。機構の変更に伴いその制度に早く馴染んでいただくために病理の後期研修を平成27年から開始される方々にも3年制を導入する決断をいたしました。後期研修が3年になりますと、剖検経験数が大きな問題となりますので、現在の40体を30体に変更し、更に様々なオプションを検討いたしております。法医学会とは、一定数(5体まで)の相互協力をするを両学会の協議会で確認し、両理事長が申し合わせの書類を作成いたしました。また、現在でも豊富な剖検数を保っているハンガリーのセンメルweis大学と病理解剖研修コースを設定することについての協定を締結いたしました。法医学会の件も含めまして平成27年度には開始できるように最後の詰めをしている段階でございます。

専門医試験はあくまでも、病理医としての活動の一通過点であるという認識で、更新までには更なる経験を積んでいただき、全体として生涯教育という大局的な考え方で、病理専門医の育成に更なる努力をしまいる所存でございます。指導者の先生

方にはくれぐれもご理解いただき、フレキシブルな内容に対応していただけますようお願い申し上げます。

また、理事長のご高配で、年2回の病理学会期間中の研修指導者会議に加えて、本年から全国大学病院病理部・病理診断科会議を開催して、密な情報交換を行い、コンセンサスを取る場を拡げてまいりますので、皆様のご協力を是非とも宜しくお願い申し上げます。

病理専門医制度が更に充実していくことを期待して私のご挨拶とさせていただきます。

北海道支部

北海道大学大学院医学研究科病理学講座分子病理学分野
笠原 正典

平成24～25年度に引き続いて、日本病理学会北海道支部長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願い申し上げます。

北海道支部は札幌医科大学、旭川医科大学、北海道大学と道内基幹病院に勤務する病理学研究者、病理医を中心として、平成26年5月現在で231名の会員を擁しています。平成24年3月時点での会員数は185名でしたので、この2年間に約50名、比率にして約25%の会員数の増がありました。このように多くの新入会員を迎えることができましたのも支部会員の皆様のご努力の賜物と、この場をお借りして感謝申し上げる次第です。引き続き、実験病理と人体病理のバランスがとれた支部運営を心がけ、病理学の未来を担う若手人材の育成に努めたいと思います。

北海道支部の主な活動は、北海道病理談話会(北海道医学大会病理分科会)、標本交見会、病理夏の学校の三つです。病理談話会は三大学の持ち回りで、毎年秋に札幌または旭川で開催され、主に若手病理研究者による研究発表の場となっています。平成24、25年度はそれぞれ一宮慎吾教授(札幌医大)、進藤正信教授(北大)を会長として開催されました。すでに46回を重ねた歴史ある会ですが、一般演題が減少傾向にあり、何らかの対策を講じる必要があると考えています。標本交見会は支部の診断病理担当幹事(北海道病理医会会長)の下、年6回開催されています。平成24、25年度はそれぞれ鹿野 哲科長(勤医協中央病院)、外丸詩野准教授(北大)が担当幹事となって開催されました。今年度で第11回を迎える病理夏の学校は毎年8月の終わりから9月の初めにかけて一泊二日で開催しています。平成24、25年度はそれぞれ西川祐司教授(旭川



医大)、佐藤昇志教授(札幌医大)が世話人をお務め下さいました。この行事は学部学生、研修医の人气が高く、大変好評を博しています。昨年度は、最近の医学生の嗜好を考慮して「シャトレゼガトーキングダムサッポロ」で行われ、参加者総勢98名(学生・研修医等62名、教員や講師の先生36名)という第10回の記念に相応しい盛大な会になりました。

病理学の健全な発展のためには、疾患の理を追求する基礎研究、基礎研究の成果を臨床に還元する橋渡し研究、病理診断の現場に根差した人体病理学研究、高い診断能力をもった病理医の育成、病理医の生涯教育がバランスよく有機的に統合されて行われることが不可欠であると考えております。支部会員の皆様には、引き続きご支援・ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

東北支部

仙台市立病院病理診断科 長沼 廣

病院病理医の立場で東北支部のお世話をする事になりました。大震災から3年が過ぎましたが、各地の復旧はまだまだ不十分です。特に福島県は原発事故のため医療従事者不足が深刻になっています。新設医大構想が進んでいますが、その効果が現れるのは10年先です。このような状況の中で東北支部長の大役を仰せつかりました。弘前大学の八木橋教授の後任として、気分も新たにこれから2年間支部の運営を担当させていただきます。



1990年大学から仙台市立病院に赴任し、25年経ちました。18年間一人病理医として第一線で仕事をし、7年前より常勤病理医二人体制となりました。やっと、外へ眼を向けやすくなりました。本年11月に新病院へ移転し、病理診断科は狭い一部屋の空間から脱出します。病院病理医という立場から支部の運営を考えたいと思います。

病理医育成には大学と市中病院との連携が必要不可欠です。学生時代に病理への興味を失った医学生を病理医の道に引き込むのは至難の技です。それでもお手本となる病理医が生き生きと仕事をしていれば、眼を向けてくれるかもしれません。現役の病理医が生き生きと仕事ができるような環境作りが大切と思っています。そのためには地域の中核となる市中病院には、必ず複数の病理医が常勤する態勢を実現してゆかなければなりません。大学および病院に勤務する若手の病理医が元気でなければ、医学生に病理の魅力を伝えることはできません。

全国の中でも東北地区は現役の病院病理医の高齢化が進んでいます。まだまだ先輩の皆さんの力に頼らなければなりません。現役で頑張っている若手に活力を注入していただかなければなりません。豊富な知識、経験を若手に伝え、ブラッシュアップ

できる、活気ある支部総会の運営を目指します。前述のように病理の世界を活性化するためには、若手医師を増やし、そのモチベーションや診断力の向上が必要です。そのために若手病理医のサポートシステム構築に取り組む考えです。具体的には診断アドバイスシステムの運用、若手病理医向けの診断のポイント講習を会員の協力を得ながら実現できればと思います。

近年、大学では若手医師の基礎研究離れが進んでいます。病院病理医にも基礎研究およびそのような思考は必須で、その力が日常の病理診断をより確かなものにします。支部総会では大学で頑張っている若手病理医に自分の仕事をしっかりアピール出来る場も多く作りたいと考えています。彼らに研究に関する講演や発表をしてもらい、支部会員に刺激を与えて欲しいと期待しています。

病理全体を活性化するためには若手病理医の存在が必須です。長年、東北支部長が多くの課題と闘ってきましたが、微力な私は多くを望まず、若手育成に関して重点的に取り組みます。各支部で行われている様々なノウハウを参考にさせていただき、東北地方、更には全国的に病理医を増やせる時代を作りたいと思います。皆様のご協力をいただき、少しでもお役立てるよう努力して参ります。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

関東支部

日本医科大学大学院統御機構診断病理学 内藤 善哉

日本病理学会関東支部会は、会員数1682名、病理専門医785名、口腔病理専門医46名を数える、日本病理学会の中で最も大きな規模の支部会であり、二期に亘り支部長として尽力されてこられた、加藤 良平先生のもと確実に発展してまいりました。そして、このように大きな規模の支部会であるため、関東支部会の活動の活性化や支部のあり方自体、種々の意味で日本病理学会に及ぼす



影響は多大なものと考えられます。特に支部会員の増加は、病理学会自体の活性化に繋がる重要な課題であり、現在、そのような課題解決に関連した支部活動を積極的に展開しております。その一つとして「病理学サマーセミナー夏の学校」では、若手病理医の育成を目指し、学部学生や研修医への積極的な働きかけを行っており、病理医の生活・仕事や働く姿、仕事を体感するとともに、臨床や患者さんの治療に直結する役割を理解するような企画を実践しています。

また、年4回開催される支部学術集会、そのうち冬に開催される支部学術集会は東京病理集談会を兼ねますが、それら集会に学部学生や研修医のみならず、病理医を目指す若手医師の参加を促し、病理に興味を抱く契機にしてゆきたいと考えています。さらに関東支部では、支部を構成している各8都県の東京都と各県で、ほぼ交互に支部学術集会を開催しています

が、学術的な知識習得の場としてのみならず、病理医間の緊密な連携を深め、種々の情報交換を行なえるような学術集会へ幅広い交流の機会にもなるようにしてゆきたいと思います。一方、現在、全国的に女性医が増え、女性病理医も多くなっています。関東支部では、病理学会と密接に連携し各支部学術集会などでの育児・託児支援をさらに進め、病理医志望者の増加、女性病理医への支援拡充をはかりたいと考えています。

関東支部の活動を正確に広報する手段として、ホームページの拡充が欠かせないものと考え、現在、ホームページの改修作業を進めています。各支部学術集会の情報掲載とともに各回で検討される症例のヴァーチャルスライドの提示、その他、関東支部会員に有益な種々の情報の発信を企画しており、さらに日本病理学会や他支部の学術集会や講習会の情報や、必要な他学会の情報などもリンク出来るよう進めています。

現在、病理関連の診療報酬の改定、専門医制度の改革など激動の時代ではありますが、少しでも関東支部会活動の活性化をはかり、さらには病理学会の発展のため、病理に関する医療状況の改善のため、微力ですが尽力して参りたいと考えています。

最後に関東支部会員の皆様方、病理学会会員の皆様方、並びに学会関係者の皆様の御支援、御協力をお願い申し上げます。

中部支部

金沢医科大学臨床病理学 野島 孝之

平成26年4月から2期目として、日本病理学会中部支部長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。支部会員数は600名を超え、夏と冬の交見会、春のスライドセミナー、夏の学校の開催、支部コンサルテーションシステムを行なっています。

日本病理学会中部支部は2000年に日本病理医協会中部支部から移行し、栄本忠昭先生(名古屋市立大学)、中沼安二先生(金沢大学)、白石泰三先生(三重大学)が歴代の支部長を務められ、日本病理学会中部支部の発展に尽くされました。それぞれの交見会やスライドセミナーで活発な議論と着実な活動がなされており、会員相互が信頼し、非常に円滑な支部の運営がなされてきていると感じております。

交見会、スライドセミナーは参加者が180名に達することも多くなり、2013年の冬の交見会では初めて200名を超えました。特に若い病理医、女性病理医の参加者が目立ちます。病理学会の100周年記念事業として、本部から託児所開設への補助が付き、以前は利用会員に一部負担金をお願いしていましたが、現在は支部の会計と併せて無料で提供しています。毎回、乳児と児童が数名ですが、お母さん病理医にとって、交見会に参加し易い環境になっていると思います。



20、30年前に比べて外国への留学者が減少した。学会や研究会で発表しても、論文として完成させないで満足している若手が増えている。との話を聞きます。中部支部の長年の問題の一つは、多くの良質の症例が交見会やスライドセミナーで発表されているにもかかわらず、我々の最も手近な機関誌である「診断病理」への投稿が極めて少ない事です。初学の若手病理医にとって、交見会、スライドセミナーは自己研鑽の登竜門として格好の場です。中部支部では幹事会、総会で議論し、将来を担う病理医を育成することを目的として、中部支部学術奨励賞を設定しました。

内容は、筆頭発表した若手病理医を対象とし、受賞者には発表内容の「診断病理」への投稿を義務づけ、中部支部は投稿料の補助を行うこととしました。若手病理医は専門医試験合格前(カテゴリーA)、専門医試験合格3年以内(カテゴリーB)に区分し、交見会及びスライドセミナーの総会時に表彰しています。2012年冬の交見会から開始し、5回の会で、カテゴリーAが12名、カテゴリーBが3名、その他、最優秀発表者などを表彰しています。若手病理医にとって受賞は刺激的で、励みになるものと確信しています。受賞者の施設指導医の努力もあり、「診断病理」への投稿数は順調に推移しています。

事務局の主な業務は、本部から会員への各種情報の配信、交見会やスライドセミナーの世話人への支援として、症例募集、標本発送、交見会当日の手伝いなど、また、協賛企業との折衝、ホームページの充実による会員への情報提供、バーチャルスライドシステムの管理などです。これから更に2年間、本部とより緊密な連携を取って、中部支部の発展のために尽力いたします。支部内外の皆様にはご支援、ご指導のほどをよろしくお願いいたします。

近畿支部

大阪市立大学大学院医学研究科診断病理学 大澤 政彦

本年度より近畿支部・支部長を拝命いたしました。どうぞよろしくお願いいたします。

近畿支部は2府4県からなり、会員数は600名を超えています。これまで伏木前支部長をはじめ歴代の支部長の御尽力により、支部活動が発展してまいりました。

支部活動ですが、5月17日に本年度初回学術集会を兵庫医科大学、辻村亨教授のお世話にて開催させていただき、その折の近畿支部総会にて、本年度の支部活動について、承認をしていただきました。学術集会は例年、年4回土曜日に開催し、午前中に症例検討を行い、午後には学術集会ごとに決められたテーマに関する特別講演と病理講習会を行っています。症例検討や午後の講演でもベテラン、若手を問わず、活発な討論が毎回なされています。これらの内容は通常の病理診断能力の向上に有用であると考えます。午後の講演、講習会の企画や講師選定



は支部学術委員の諸先生方に担っていただいております。また、各セッションでの座長も務めていただいております。このようなシステムはこれまでの支部活動のなかで定着してきたものであり、若手病理医・研究者に活躍の機会を与えるという点からも効果的に機能しているとおもわれ、今後も続けていきたいと考えています。また、学術集会の内容は診断病理についてが主体となりますが、そこに病理診断に必要な基礎的知識(実験病理学分野で得られた知見など)を講演に加えることによって「奥の深い病理学」学ぶ機会を提供するというのも、これまでの学術集会の方針の1つでありましたので今後も更に発展させるよう尽力してまいりたいと考えています。

さらに、支部会では、若手病理医育成の目的で、奨励賞を設けております。学術集会で優れた症例報告を行った若手病理医に加えて、公募により病理学研究で優れた業績を上げた病理医を顕彰し、支部レベルでも優れた若手病理医の育成に努めてまいりました。昨年度は公募部門にお応募者がなく残念な結果でありましたが、今後も会員の皆様に周知するとともに、継続発展させていきたいと考えています。

病理学の未来を担う若手人材のリクルートは支部活動においても重要な課題です。病理学を志す学生や研修医を増やすことは一朝一夕にできるものではありませんが、様々な機会をとらえて行っていくことが重要であると考えています。そこで、近畿支部においても本年度から、学生、研修医を対象とした「夏の学校」を8月に開催することといたしました。本年度は京都大学にて羽賀博典教授のお世話により開催されますが、今後も継続して開催することにより、病理医の増加をめざし、努力してまいりたいと思います。

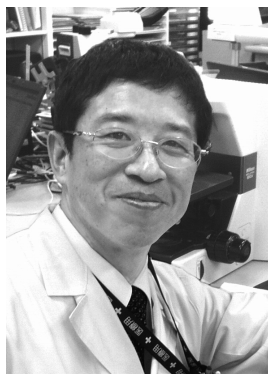
さらに、支部会員のご意見やご要望を把握し、日本病理学会の運営に反映することも、支部の役割の一つであります。ご意見などございましたら忌憚なく事務局までお寄せいただきたいと思います。

近畿支部発展のため、微力ですが、力を注いでまいりたいと考えたおりますので、ご支援・ご指導を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

中国四国支部

川崎医科大学病理学2 森谷 卓也

この度、中国四国地区の支部長を拝命いたしました、川崎医大の森谷です。私は、平成10年から19年まで東北新潟支部の事務局を担当、その後倉敷に戻り、井内康輝支部長、吉野 正支部長のもとで、5年半、広報を担当させていただきました。それぞれ特徴のある支部で多くの皆様からご指導を賜ることができました。改めて厚く御礼申し上げます。これからは中国四国支部の支部長として、日本病理学会と支部との情報伝達を滞りなく行う



よう、精一杯努力致す所存です。

さて、現在の中国四国支部における活動は、毎年3回各地で開かれる、スライドカンファレンス(本年度6月が第114回です)、学生や研修医を対象とした病理夏の学校(本年が15回目です)およびホームページを通じた情報交換(支部内のコンサルテーション、会員異動の把握、など)が主たるものとなっています。平成26-27年度の2年間も、これらの支部活動を滞りなく遂行し、支部会員の皆様により良い情報発信をさせていただくよう、努力することを前提と致したいと思います。その上で、いくつかの懸案事項と、今後の取り組みについて私見を述べさせていただきます。

第1の問題として、専門医制度の変革が挙げられます。執筆時点では未確定要素も残されておりますが、専門医を取得するための研修システムは、基幹となる施設や協力施設間のローテーションなどが考えられています。現実には大学を中心にして関連施設との連携をとる場合が多いのかもしれませんが、都道府県単位以外に、支部全体としても、円滑な連携をとっていただけるよう情報収集を行いたいと思います。また、専門医の維持のためには総会や秋季大会以外に、支部単位での講習会(医療安全、倫理、感染症対策、など)が必要になると推測されますので、担当の委員会と協議して取り組みたいと思っております。第2点は、病理医のリクルートです。個々の施設内での努力が最も重要ではありますが、中国四国の地域で、情報発信を強化したいと思います。そのためには、夏の学校には力を入れる必要がありますし、第103回総会において学部学生の皆さんから提言された内容も、十分吟味してゆきたいと考えています。また、現在ホームページに掲載中の「病理専門医への道」「口腔病理専門医への道」も充実させアピールの場にしたいと考えます。第3点は、スライドカンファレンスのことです。伝統あるカンファレンスの資料は極めて貴重であり、それらをうまく二次活用できないか、という意見が出ております。有効な利用法について模索をしたいと思います。

他にも、これからの話し合いによって、取り組んでゆくべき事案があるように思われますので、役員、委員の皆様、支部会員の皆様と認識を一にし、地域における病理の発展のために少しでもお役に立てればと存じます。しかし、何分浅学菲才の身でございますので、支部内に限らず、皆様からのご指導・鞭撻を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

九州沖縄支部

大分大学医学部診断病理学講座 横山 繁生

九州沖縄支部・支部長として2期目を務めることになりました横山と申します。年の割にまだまだ未熟者ではありますが、宜しくお願いいたします。

前支部長の橋本洋先生がホームページの充実、医学生・研修医を対象とした病理学校の開設、支部スライドカンファレンス(スラコン)出題例のヴァーチャルスライド化および過去出題症例のアーカイブ化等、多くの新規事業を始められました。1期目の2年間はこれらの支部事業の充実に努めるとともに、新規事業として、病理専門医試験受験のためのガラス標本(ティーチ

ング・ファイル、TF)の回覧システムを作りました。懸案であったTFのヴァーチャルスライド化も終了し、若手病理医にとって効率よい受験勉強の環境が整ったと考えています。また、若手病理医の情報交換と親睦を図るため2年前に発足した「若手病理医の会」も軌道に乗り、彼らの企画による教育講演も2度開催されました。



九州沖縄支部の主な活動は年6回開催されるスラコン、年1回同時開催される剖検例を扱った病理集談会や年2回の学術講演、若手病理医リクルート事業としての病理学校が中心になります。特に、スラコンは今年7月で340回を数え、若手病理医の育成やベテラン病理医の生涯教育に欠かせない存在になっています。また、スラコン出題例の中から興味深い5-6症例を支部学術委員が投票で選定し、雑誌「診断病理」への執筆を依頼しています。今年の支部総会では、1年間のスラカン出題者から数人を表彰する顕彰制度が提案・承認されました。現在、学術委員会がその選定方法を検討中で、来年の総会で第一回表彰式を行う予定です。その他、日本臨床細胞学会・九州連合会主催の技師を対象とした九州細胞診研修会に相乗する形で、細胞診専門医試験受験者を対象とした細胞診研修会も年1回開催されています。2001年から始まった支部独自のコンサルテーション・システムの症例は年間60例前後で推移しています。日本病理学会や国立がん研究センター主導のコンサルテーション・システムもありますが、支部システムは手軽さもあってそれなりに支部会員の役に立っているようです。若手病理医リクルート事業としての「病理学校」は今年で4回目を迎えます。当時6年生だった第1回「病理学校」の参加者2名が今年から病理医を目指しています。これからは、「病理学校」がきっかけとなって病理医を目指す若手医師が増加するものと期待しています。

最後に、日本病理学会および九州沖縄支部の発展に微力ながらも尽力したいと考えております。特に九州・沖縄支部会員の皆様には一層のご支援、ご協力をお願い申し上げます。

== 特集 ==

病理診断科と臨床検査科の関係について

名古屋市立東部医療センター病理診断科 鈴木 周五
病理診断科と臨床検査科の関係を鑑みるに、繋がり of 一番強い要素は臨床検査技師ではないでしょうか。特に病理診断科にとって優秀な技師の確保は重要で、仕事全般の質向上に関与し、当病院に赴任して約5年の間、大過なく病理診断科運営ができたのは、所属する技師のおかげと思っています。病理診断科においても新しい機器の導入や、機器更新は重要ではありますが、標本作製や細胞診スクリーニングなど、重要な役割は結局のところ臨床検査技師が担っており、技師の教育を含めた優秀な技師を維持できる体制作りが重要と思っています。

さて、そのための技師の人員確保と管理ですが、当病院は他病院に比べ複雑な状況にあります。もともと名古屋市立病院は5つ存在し、当病院は其中で一番大きな病院でしたが、近年の病院改革プランにより市立病院は統廃合され、今現在は、ほぼ同じ規模の東部および西部医療センターの2病院体制になりました。そういった過去の経緯から、市立病院内の臨床検査技師人事異動は、一番大きな病院だった当病院の技師長が管理しています。一方で、多くの病院を統括する部署として病院局が存在し、各病院における技師の人員数と配置を行っています。というわけで、病理診断科も含め、臨床検査技師の管理・育成は、単病院内で完結されているわけではなく、各病院の各科管理者は、他病院にない悩みを抱えております。

そんなおり、平成27年には救急・外来棟が開設し、救急患者が増えるとともに、手術室も新しくかつ多く設置されることが決まっています。そのため、中央検査科も病理診断科も仕事量増加に向けて準備しなければなりません。その準備の中で、病理診断科において長年の課題であった病理診断科配属技師の増員は、病院長および技師長に相談し、実現のために協力・支援して頂いているものの、人員増員の決定権は病院局に存在し、簡単には進みません。近年の公務員削減方針により、病院局としても安易な増員は出来ない状況であり、これからも同じような状況が続くそうです。現技師長は中央検査科だけでなく病理診断科の状態についても真摯に取り組まれており、いずれの科においても明るい未来が待ち受けているよう、協力して頂いています。今現在、築40年以上の伝統ある？病棟で働いており、中央検査科と病理診断科は物理的に離れていますが、5年後に完成する新病棟においては隣接する予定で、より一層の協力関係が生まれると考えています。

病理診断科と臨床検査科が良好な関係を築くための方法

順天堂医学部附属練馬病院 病理診断科 松本 俊治
順天堂大学医学部附属練馬病院、病理診断科は3名の病理医(松本俊治特任教授;小倉加奈子准教授;坂口亜寿美助手)が常勤病理医として勤務し、松本、小倉准教授は日本病理学会専門医・指導医で、さらに小倉准教授は日本臨床検査医学会専門医でもある。以上の状況から病理診断科科長は松本が務め、小倉准教授は臨床検査科の科長を務めている。病理診断科の業務は3名の病理医が効率よく作業を分担し、また臨床各科とのカンファランス(総合外科、小児外科、呼吸器外科、放射線科との合同での術前術後症例検討会(週2回);皮膚科との病理診断カンファランス(週1回);脳神経外科、婦人科、泌尿器科との病理診断カンファランス(月1回);乳腺カンファランス(月1回))を積極的にを行い院内の各科から絶大な信頼を得ている。

臨床検査科での業務に関しては、検体検査(生化学、血液・凝固、免疫血清、尿一般)は開院以来SRLによるブランチラボ方式を導入しSRL職員が行っているが、細菌、輸血、採血、生理機能検査(循環機能検査、超音波検査、呼吸機能検査、脳波・筋電図、聴力検査)は当院技術員が行っている。骨髓像に関しては、病理診断科内の診断室で技術員がスクリーニングを

行い、小倉准教授が病理骨髄検体と同時に診断を下し、診断精度を高めている。

初期臨床研修医(27～29名)は2年目の研修で、臨床検査科、病理診断科を選択する臨床研修医が多く、小倉准教授が両科の教育を技術員の助けを借りて行っている。臨床研修医教育は、小倉准教授が中心になり、三宅紀子先生、小栗豊子先生との共著で出版した“研修医のための臨床検査・病理マニュアル、羊土社”は評判がよいことより、このマニュアルをベースに行っており、この教育は臨床研修医から高い評価を得ている。

当院は病理診断科と臨床検査が良好な関係を築いているが、この良好な関係を築くためには、病理診断科と臨床検査科が行っていることを相互に理解し、共同で行える作業は協調して行う(骨髄像の診断など)ことが重要と考える。また、臨床研修医の教育を病理診断科と臨床検査科が相互に助け合い行うことは、全国的にみても数が少ない病理診断医、臨床検査医の増加につながることも考える。

病理を基軸とする検査医の所感 ～ありのまま

徳島赤十字病院検査部副部長 山下 理子

私は3年の内科臨床を経て病理の院を卒業し、平成17年に、それまで県内ですべて病理医一人であった市中病院に、初めて二人目の病理医として赴任し、病理専門医を受験、平成20年から検査部所属となりました。検体検査管理加算IVを算定している病院では、二人目病理医を検査部所属とすることは普通ですが、私の場合、検査部が検査の国際規格であるISO15189日本初の取得をしたところであり、昨年9月に更新を中止するまでの5年間、どっぴりとISOという魔物と格闘したところが異色でした。この間、初期研修医に病理検査部実習を必須としたこと、検査技師の同時育休、黒エリアにかかわったこと、プライベートで双子を出産したこと、義母の病氣と看取りなど、周囲の人の理解のおかげでどうにか乗り越えて今に至ります。私に協力してくれた人も大変だったと思います。

この5年余り病理を軸とする検査医として過ごしてみて、感じたことをありのまま列挙したいと思います。

メリット

- ・臨床検査専門医試験を早期に合格することで、検査に関する知識が広がった。

- ・分子標的治療関連など、検査と病理への仕事の振り分けがしやすくなった。

- ・検査技師全体の人事のむずかしさが理解できた。(わかりすぎて少々つらい・・・)

- ・若くても、診療部長会議、院長ブリーフィングなどに参加し経営部とやり取りする機会ができる。悶々と疑問を持たなくてよくなる。

- ・「自分は病院で検査技師の労働と、臨床に関連する基礎医学の担当」と割り切ることで、法医学や輸血学など抵抗感がなくなった。

- ・病理部内の事細かなことが気になったりしていたが、一度出

て、技師長から病院全体の動きを開けることで視野が広がり、システムの問題の可変部を修正する発想ができた。

- ・ISOとは何か、検査部の品質方針、倫理規定、病院方針や就業規則、関係法規との整合性(わすれたこともあります・・・笑)、情報見える化など、これまで考えたことのない「文系的」事項を知り考えた。また、ISOを辞めるにあたり、「理系人」の生き方、目指す方向、意思統一の方法について、腹痛がするほど考えたが、無駄ではなかったと思う。

デメリット

- ・検査技師と医師のモチベーションや生き方の差に直面し、悩む(特に子育ては自問させられる)。

- ・同じ立場の医師が余りいないので孤独。若手や女医の代表と誤解され、雑務が増える。

- ・仕事をこなすうえで、部員面接と病理診断が両立できる個室、医療クラークなどが必要。

- ・私は問題なかったが、病理検査技師の処遇には、病理部長に決定権があり、技師長の調整能力がよほどないと、検査側の病理医は悩むだろう。

- ・若い方の医師が検査専従となり、時間的8割専従を義務付けられると、検査室管理が専門医取得、子育てなどともブッキングし、病理の研鑽の時間が減る。私の場合、細胞診専門医取得が遅れた。診断に支障が出たことも正直ある。

- ・外科系あるいは病理だけの経験者には、検査全般を理解(したふりをして引き受け)るのは難しいように感じる。当直をする内科医はあまじてその責を受けているが(笑)、逆にいえば、病理に興味ある優れた内科医を、検査部所属の病理医としてヘッドハントできるように思う。

以上、単にハチャメチャ娘に分別が出てきただけでも言えますが、検査部にかかわって開けた世界がたしかにあるように思います。検査業務は、リアルタイムの臨場感がありますが、学会日程表を比較してもわかるように、病理診断、病理分野は広く深く本質的で、進歩にことかかず、知識取得に膨大な時間がかかり、だからこそ私は病理を基軸にしつづけるのです。

実感として、臨床検査技師の地位は向上しつつあり、彼らの権限を広げ、代わりに検査医の空間的時間的専従を内容的専従とすべきです。病理を軸とする検査医は、時間を病理診断に多く費やしても、検査技師と二人三脚で精度管理委員会や医療安全などで内容を把握することが可能だと思います。技師長でさえ、専門分野の業務の傍ら管理を行うのですから、検査部長が病理に基軸をおいて、悪いはずはありません。人手の足りない市中病院では、そうでないと成り立ちません。

専門医を考える立場の方は、アメリカには病理診断を主とするAPコースより、病院検査室管理を兼ねるAP/CPコースを選択する病理医が主流であることを、ご考慮ください。保険診療でそのような道が許され、専門医資格として確立すれば、法医学者、病理医、検査医不足は、ともに解消に向かっていくことと思います。

== 課外活動 =====

私の課外活動

新潟大学大学院 医歯学総合研究科
分子細胞病理学分野(第二病理) 長谷川 剛

200X年4月初旬、ミャンマーに渡航中、滞在先のホテルに電話がかかってきた。「娘の体調が悪い。某総合病院を受診し、再検査と言われたけど、心配で・・・」ミャンマー滞在中ではどうにもならないが、「勤務先に行け」と告げ、次の電話で「大学病院に入院した。病名は疑った“糖尿病”らしい」と連絡が入った。帰国後、病棟で無邪気にトロのビデオを楽しむ娘を看病しながら涙があふれた。朝昼晩にインスリンを打ちながら、幼稚園への通園も無事始まった。

以前、インスリン依存型糖尿病(IDDM)と総称されていた1型糖尿病(Type 1 DM: T1DM)である。年末年始に風邪様症状と高熱で寝込んだが、春休み前から、多飲・多尿に気付き、やせもあった。かかりつけの小児科医院のご子息もT1DMで、奥様の体験記が待合室にあり、家内はそれを覚えていて疑ったのだった。

その後、自身がT1DMの医師による「脳内“すい”移植」の講演が新潟であった。脳に膵移植ってどうするんだ!?と思ったが、“各個人の食事や運動に合わせて、適切に考えて!!インスリンを打ち分けよう”のメッセージで、T1DM=インスリン欠乏症の理にかなっていた。我が家は食事や遊びに基づいてインスリン量を増減していたが、気楽になった。但し、同じく家族の参加もあったが、交流してお互いに驚いた。インスリンを投与しながら、“食事カロリー制限および運動療法”、さらに養護学校に通っていた。これはヤバいとその場でT1DM専門の小児科医を紹介した。

新潟1型糖尿病患児・家族会の“ペガサスの会”を、かかりつけの小児科医の後任として、そのT1DM専門小児科医と共に2008年以降運営してきた。新たにT1DMを背負った患児・家族を、家族会としてフォローできればと、年4回の企画の開催を心掛けてきた。埋もれていた患者や新規患者を受け入れ、引き継ぎ当初18人のメンバーは現在60人程(+ OG/OB)で、県内の小児科患者はほぼ網羅した。

一方で、成人発症のT1DMでは、インスリン補充をしながら2型糖尿病と同様に食事カロリー制限を受けたり、T1DMであること自体に苦悩したりする患者がいる。東京女子医大糖尿病センターの「若い糖尿病患者さんとのグループミーティング」に参加して同様の企画をしたいと思うと同時に、より広くT1DM患者を受け入れることのできるペガサス分科会「“であい”の会」を立ち上げた。本会は、新規患者とベテランなど同志との出会いや栄養士・看護師を含めた医療者との出会いを謳っているが、“チャブレン”の存在が大きい。日本初のホスピス設立への参画を始めとし、医療者と別の視点で患者と向き合った経験が豊富なチャブレンで、参加者を癒やすとともに、様々な逸話で各会を総括し締めてくれる。例えば「病気を理解しようとする理性と、病気と対峙する感情を持つ人間としての尊厳は別で、そこにジレンマは必要不可欠だ」と。

それでは病理医が患者会で何が出来るだろうか!?率直に、1

型糖尿病や劇症1型糖尿病の剖検例を紹介して、多様な“糖尿病”を説明しているが・・・。(繰り返しになるが、T1DM=インスリン欠乏症である)患者自身や家族には、医療者が説く“糖尿病”の観念で自らの疾患を理解しようとする理性はあるが、実際に対峙している“糖尿病”への想いはそれぞれ違っている。従って、“糖尿病”の括りでの画一的な医療情報・概念の提供のみでの相互理解は難しく、自ずと医療者と患者との間にはジレンマが生じてくる。もう一つ踏み込んだ患者とのオーダーメイドでの情報共有が必要なのでないかと思うのである。

これまで病理医は、各疾患を組織・細胞レベルさらには遺伝子レベルで理解する一方向での関与が主体で、病理診断を含め疾患名が診断を下された「病んだ個人」に接する機会にはほぼ皆無であった。最近では、病理外来が少しずつ広まっているが、第三者的な病理医の介入が活かされる機会は、患者個々にも患者会においても多いにあると考えている。病理医の門戸が「病んだ個人」にも拓かれ、患者と医療者が疾患を共有する時の共感する経験が生きるよう、患者会での研鑽を積んでいる。

== 投稿 =====

第102回日本病理学会総会学生発表に参加して

杏林大学医学部病理学教室 望月 眞

今回、医学部3年生2名の担当になり、学生演題発表に参加しました。病理総論の講義が始まる学年で何も知らない所からのスタートです。約1年がかりで症例報告に取り組んでもらいました。自主的に文献を集めたり、共同演者の国立感染研究所の片野先生の研究室を見学させていただいたり、単なるお勉強でない、クラブ活動的なので進めました。合言葉は「広島で飲む」でした。

学会当日は、学生だけの懇親会など素晴らしい場が企画されており、素晴らしい盛り上がりでした。会長の安井先生はじめ関係の諸先生方に感謝いたします。

以下、参加学生の感想です。

杏林大学医学部 尾坂 真

指導していただいた望月先生にはいくつかのテーマを提示していただき、その中で私は興味がある婦人科腫瘍を選択しました。すでに病理の総論は講義で聞いていたものの、普段は講義で与えられることに慣れている私は自分で知りたい情報を探すだけで四苦八苦しました。また多くの論文は英文であり、一報読むのに時間がかかることも苦労した原因の一つです。時間がかかったものの、病理学教室の先生方にアドバイスをいただきつつポスターを作成し発表練習をした結果、本番の発表はスムーズに出来たと思いました。しかし他の学生のポスターを見て発表を聞くと、私以上に深い理解の基に素晴らしいプレゼンテーションをしている学生が多数いることに気がつきました。学会という学術発表の場の雰囲気を感じ、病理学に興味のある学生の探究心に触れられたことは、私にとって残りの学生生活とその後の進路を考える上で非常に有意義な経験をつむことができました。

対象を洞察し、主張を設定し、論証する。顕微鏡を覗き文献を調べる。いずれも組織学実習やそれ以前の場面で面白いと感じていることでした。故に、病理学総論の授業で学会についての案内があったその日に参加を志願しました。先生から題材を頂いたため約半分は題材について学ぶ時間でしたが、文献検索や標本観察は空き時間に行い、月2回程度は授業後に集まってご指導頂く中で、論証の材料集めの勉強にも面白さを見出しました。日頃の勉強や実習と異なり自分で語るために学び、調べたために主体的に取り組むことが出来、得られる満足感は一入でした。実際の病理医の仕事を部分的にでも体験出来たことは将来を考える上でも非常に有意義でした。自分の質問対応や他の発表への質問が稚拙なことには勉強不足を痛感しますが、次回があればこうしたいということが次々と思い浮かびます。いずれまた挑戦したいと思っています。

== 支部報告 =====

――関東支部――

第63回日本病理学会関東支部学術集会開催報告

世話人：昭和大学歯学部口腔病態診断科学講座口腔病理学部門 美島健二

2014年6月21日、昭和大学において第63回日本病理学会関東支部総会・学術集会が開催されました。当日は174名の参加者があり、レクチャー2題、特別講演1題など口腔病理領域の有意義な講演、さらに一般演題5題の症例検討を含めて、大変な盛会でした。

一般の病理医は普段は接する機会が少ないけれども、重要な病理診断領域である口腔病理のエキスパートから研究、診療に役立つ内容の講演を聞く貴重な機会を得ることができました。また、5題の貴重な症例を供覧、検討できました。

当日のプログラムは以下の通りです。

1. 開会のあいさつ
美島健二(昭和大学歯学部口腔病態診断科学講座口腔病理学部門)
2. 関東支部会総会
3. レクチャー「口腔癌の病理診断」
座長：河野葉子(昭和大学歯学部口腔病態診断科学講座口腔病理学部門)
1) 新しい口腔細胞診診断基準と細胞所見
久山佳代(日本大学松戸歯学部口腔病理学講座)
2) 早期口腔癌の病理組織診断について
森泰昌(国立がん研究センター中央病院病理・臨床検査科)
4. 特別講演
座長：瀧本雅文(昭和大学医学部臨床病理診断学講座)
歯原性腫瘍の病理診断
菊池建太郎(明海大学歯学部病態診断治療学講座病理学分野)
5. 一般演題
座長：九島巳樹(昭和大学江東豊洲病院臨床病理診断科)
1) HHV8関連タンパクの特徴的発現パターンを示したHHV-8-positive Plasmablastic lymphomaの一例 山田正俊(東京医科大学分子病理学分野)
2) 神経内分泌癌および多形癌が混在した肺癌の1例
朝比奈未紀(順天堂大学医学部人体病理病態学講座)
3) 小児に発生したHistiocytic sarcomaと考えられた一例
天野雄介(日本大学医学部病態病理学系病理学分野)
座長：大池信之(昭和大学藤が丘病院臨床病理診断科)
4) 脳腫瘍の一例
近藤裕介(東海大学医学部基盤診療学系病理診断学)

- 5) 子宮体部ポリープ様病変の一例
九島巳樹(昭和大学江東豊洲病院臨床病理診断科)

関東支部 第67回埼玉病理医の会

期日：平成26年5月16日(金)

会場：埼玉医科大学総合医療センター

世話人：田丸淳一 参加人数：25名

症例1

出題者所属・氏名：埼玉医大総合医療センター病理部 藤野智史

年齢・性別：75歳男性

臓器・臨床診断：冠動脈、大動脈など・多発性冠動脈瘤、腹部大動脈瘤を併発したIgG4関連疾患の一部検例

病理診断：IgG4関連疾患(冠動脈、大動脈など全身諸臓器)、急性期心筋虚血性変化、陳旧性心筋梗塞など

検討内容：冠動脈瘤の発生病態、炎症性大動脈瘤との関連性など

症例2

出題者所属・氏名：埼玉医科大学国際医療センター病理診断科 永田 耕治

年齢・性別：85歳女性

臓器・臨床診断：小腸・小腸イレウス・多発小腸狭窄

病理診断：NSAID関連腸炎

検討内容：診断確認、病態について

症例3

出題者所属・氏名：さいたま赤十字病院 安達 章子

年齢・性別：30歳代 男性

臓器・臨床診断：左足関節皮膚パンチ生検・うつ滞性脂肪織炎

病理診断：Kaposi肉腫、斑状 期

検討内容：特徴的所見について。HHV-8陽性細胞について。

症例4

出題者所属・氏名：埼玉医大国際医療センター病理診断科、山口浩

年齢・性別：39歳・女性

臓器：胸腺(縦隔)

臨床診断：縦隔悪性腫瘍

病理診断：縦隔(胸腺)原発大細胞型B細胞性リンパ腫

検討内容：癌との鑑別を要した縦隔リンパ腫について。CD30陽性縦隔リンパ腫の鑑別について。

――中部支部――

中部支部編集委員 森谷 鈴子

2014年中部支部「夏の学校」のお知らせ

日時：平成26年8月9日(土)、10日(日)

場所：ホテル海望(七尾市和倉温泉)

世話人：金沢医科大学病理学Ⅰ講座 清川 悦子先生

金沢医科大学臨床病理学 湊 宏先生

次回学術集会

第74回中部支部交見会

日時：平成26年12月20日(土)

場所：名古屋大学

世話人：下山芳江先生

東海病理医会 検討症例報告

第297回

(平成26年2月15日 参加者13名 於：藤田保健衛生大学)

症例番号 / 病院名 / 病理医 / 年齢 / 性 / 臓器 / 臨床診断 / 病理組織学的診断

4649 / 藤田保健衛生大学 / 中川 満 / 40 / 男 / 小腸 / 小腸腫瘍 /

Gastrointestinal stromal tumor

4650 / 藤田保健衛生大学 / 浦野 誠 / 80 / 女 / 副腎 / 副腎腫瘍 /

Adrenocortical carcinoma

4651 / 静岡厚生病院 / 浦野 誠 / 60 / 女 / 腓 / 腓腫瘍 / Schwannoma
4652 / 総合青山病院 / 黒田 誠 / 30 / 女 / 軟部 / 軟部腫瘍 /
Plexiform schwannoma
4653 / トヨタ記念病院 / 北川 諭 / 80 / 男 / 皮膚 / 陰嚢腫瘍 /
Verruciform xanthoma
4654 / トヨタ記念病院 / 北川 諭 / 60 / 男 / 肝 / 肝腫瘍 /
Adenocarcinoma arising from IPNB
4655 / 鈴鹿中央総合病院 / 村田 哲也 / 20 / 男 / 尿道 / 尿道ポリープ /
Fibroepithelial polyp

第298回

(平成26年3月22日 参加者15名 於:藤田保健衛生大学)
4656 / 藤田保健衛生大学 / 熊澤文久 / 40 / 男 / 鼻腔 / 鼻腔腫瘍 /
Olfactory neuroblastoma
4657 / 藤田保健衛生大学 / 中川 満 / 50 / 男 / 結腸 / 直腸穿孔 /
Colonic perforation due to calcium polystyrene sulfate
4658 / 藤田保健衛生大学 / 中川 満 / 30 / 女 / 肺 / 肺良性腫瘍 /
Sclerosing hemangioma
4659 / 藤田保健衛生大学 / 岡部麻子 / 60 / 女 / 膀胱 / 膀胱癌 /
Malakoplakia
4660 / 藤田保健衛生大学 / 岡部麻子 / 70 / 男 / 結腸 / 結腸粘膜下腫瘍 /
DALM
4661 / 清水厚生病院 / 浦野 誠 / 60 / 男 / 食道 / バレット食道癌 /
Barrett esophagus cancer
4662 / 諏訪中央病院 / 浅野功治 / 40 / 女 / 卵巣 / 卵巣 / Choriocarcinoma
4663 / 岐阜大学病院 / 齊郷智恵美 / 70 / 女 / 上顎洞 / 上顎洞腫瘍 /
Adenoid cystic carcinoma
4664 / 鈴鹿中央総合病院 / 村田哲也 / 70 / 男 / リンパ節 / 悪性リンパ腫疑い /
Mantle cell lymphoma
4665 / 鈴鹿中央総合病院 / 村田哲也 / 80 / 男 / 胸膜 / がん性胸膜炎 /
Malignant mesothelioma
4666 / 鈴鹿中央総合病院 / 村田哲也 / 70 / 女 / 脾 / 脾腫瘍 /
Hamartoma
4667 / 小牧市民病院 / 栗原恭子 / 40 / 男 / 皮膚 / 皮膚腫瘍 /
Pigmented Spitz nevus

第299回

(平成26年4月12日 参加者17名 於:藤田保健衛生大学)
4668 / 藤田保健衛生大学 / 熊澤文久 / 60 / 男 / 皮膚 / 皮膚腫瘍 /
Cutaneous Leiomyosarcoma
4669 / 藤田保健衛生大学 / 桐山諭和 / 20 / 男 / 腓 / 腓頭部腫瘍 /
Ewing's sarcoma
4670 / 藤田保健衛生大学 / 浦野 誠 / 50 / 女 / 鼻腔 / 鼻腔腫瘍 /
Rosai-Dorfman disease
4671 / 蒲郡市民病院 / 浦野 誠 / 40 / 女 / 卵巣 / 卵巣腫瘍 /
Sertoli stromal tumor with intermediate differentiation
4672 / 藤田保健衛生大学 / 浦野 誠 / 50 / 男 / 腎 / 腎癌 /
Clear cell papillary RCC in non-cystic end-stage renal disease
4673 / 新城市民病院 / 黒田 誠 / 70 / 男 / 腎 / 腎癌 /
Clear cell papillary RCC in cystic end-stage renal disease
4674 / 飯田市民病院 / 尹 漢勝 / 70 / 女 / 膀胱 / 膀胱腫瘍 /
High grade urothelial carcinoma with rhabdoid feature
4675 / 飯田市民病院 / 尹 漢勝 / 50 / 男 / 膀胱 / 膀胱腫瘍 /
High grade urothelial carcinoma with neuroendocrine feature
4676 / 鈴鹿中央総合病院 / 村田 哲也 / 70 / 女 / 卵巣 / 卵巣腫瘍 /
Carcinosarcoma
4677 / 鈴鹿中央総合病院 / 村田 哲也 / 50 / 男 / 腎 / 腎腫瘍 /
Multilocular renal cell carcinoma
4678 / 大同病院 / 小島 伊織 / 40 / 女 / 肝 / 転移性肝腫瘍 /
Malignant lymphoma

――近畿支部――

近畿支部編集委員 桑江 優子

I. 活動報告

第65回日本病理学会近畿支部学術集会が下記の内容で開催されました。(検討症例、画像等につきましては(<http://jspk.umin.jp/member/program65th.pdf>)にて閲覧可能です。パスワードの必要な方は事務局までお尋ね下さい)

日時:2014年5月17日(土)

場所:兵庫医科大学 3号館4階

世話人:辻村亨先生(兵庫医科大学)

モデレーター:清水重喜先生(兵庫医科大学)

テーマ:悪性中皮腫の病理

症例検討

座長:鳥井郁子先生(兵庫医科大学)

845 胸膜生検の一例

上原慶一郎 先生, 他(神戸市立医療センター中央市民病院 臨床病理科, 他)

846 胸部腫瘍の1例

原田博史 先生, 他(生長会病理センター 府中病院 病理診断科, 他)

座長:三輪秀明先生(大阪労災病院)

847 脛骨腫瘍の1例

森永友紀子 先生, 他(神戸大学医学部附属病院 病理診断科, 他)

848 骨腫瘍の1例

渋谷信介 先生, 他(京都大学医学部附属病院 病理診断科)

座長:辻村亨 先生(兵庫医科大学)

特別講演:「悪性中皮腫の病理:形態学的鑑別のむつかしさ」

岡輝明先生(公立学校共済組合関東中央病院 臨床検査・病理科)

病理講習会:「悪性中皮腫の診断から治療まで」

座長:大林千穂 先生(奈良県立医科大学)

清水重喜 先生(兵庫医科大学)

1. 悪性中皮腫の診断から治療まで:内科の立場から
大搦泰一郎 先生(兵庫医科大学 内科学(呼吸器・RCU科))

2. 悪性中皮腫の細胞診断

河原邦光 先生(大阪府立呼吸器・アレルギー医療センター 病理診断科)

3. 悪性中皮腫の病理診断

酒井康裕 先生(神戸大学医学部附属病院 病理診断科)

4. 中皮腫診断におけるFISH法の有用性

大林千穂 先生, 他(奈良県立医科大学 病理診断学)

5. 悪性中皮腫の診断から治療まで:外科の立場から

橋本昌樹 先生, 他(兵庫医科大学 呼吸器外科)

II. 今後の活動予定

II-1 夏期病理セミナー『夏の学校』

日程:日程:2014年8月9日(土)

場所:京都大学医学部記念講堂

テーマ:病理医という仕事

対象:医学生、初期研修医

13:00: 開会の言葉

13:10:国家試験対策クイズ /解説

渋谷信介先生・片岡竜貴先生(京都大学医学部附属病院 病理診断科)

14:30:

講演1 「病理医覚え書」から30年

九嶋亮治 先生(滋賀医科大学臨床検査医学講座)

講演2 研究者になる! ～L1CAMと私～

伊東恭子 先生(京都府立医科大学分子病態病理学部門)

講演3 -卒後10年目を迎えて- 病理医として、母として、皆さんに伝えたいこと

大江知里 先生(関西医科大学附属病院病理科)

講演4 卒後5年目の医師が見た病理の魅力3点

-建前と本音をほどよく混ぜながら-

竹内康英 先生(大阪赤十字病院病理診断科)

16:45: 成績優秀者発表、景品授与
16:55: 閉会の辞
17:30: 懇親会

II-2. 第66回日本病理学会近畿支部学術集会

日時:2014年10月11日(土)

場所:京都府立医科大学

世話人:伏木信次先生(京都府立医科大学)

モデレーター:岸本光夫先生(京都府立医科大学)

テーマ:消化器疾患

---中国四国支部-----

中国・四国支部編集委員 串田 吉生

A. 開催報告

1. 第114回学術集会

開催日:平成26年6月14日(土)

場所:高知大学医学部 臨床講義棟 第3講義室

世話人:高知大学医学部病理診断部 弘井誠先生

一般演題19例が集まり、活発な討議が行われました。発表スライドや投票結果は<<http://csp.umin.ne.jp/pctindex.htm>>から見ることが出来ます。また、名古屋第一赤十字病院副院長・病理部長の伊藤雅文先生による特別講演も行われました。

特別講演「骨髄病理組織の見方・考え方」

伊藤雅文先生(名古屋第一赤十字病院副院長・病理部長)

一般演題

演題番号/タイトル/出題者(所属)/出題者診断/最多投票診断

S2509/類粘膜腫瘍/小川郁子(広島大学病院口腔検査センター)/

Solitary fibrous tumor/concord

S2510/頸部皮下腫瘍/仲須千春(徳島大学医学部医学科)/

Spindle cell lipoma/concord

S2511/後腹膜腫瘍/中嶋絢子(高知県立幡多けんみん病院臨床検査科病理)

/Dedifferentiated liposarcoma/concord

S2512/鼠径部皮下腫瘍/中山宏文(広島鉄道病院臨床検査室)/

Cellular angiofibroma/Spindle cell lipoma

S2513/皮膚腫瘍/藤井将義(岡山医療センター臨床検査科病理)/

Cylindroma + Eccrine spiradenoma/Cylindroma

S2514/後縦隔嚢胞性病変/高橋友香(岡山赤十字病院病理診断科)/

Mullerian cyst/Bronchogenic cyst

S2515/右大?部多発性皮下結節/齊藤彰久(呉医療センター・中国がんセンター

病理診断科)/Primary cutaneous gamma-delta T-cell lymphoma/Subcutaneous

panniculitis-like T-cell lymphoma

S2516/下?部腫瘍/石川典由(島根大学医学部器官病理学)/

Pigmented villonodular synovitis with chondroid metaplasia/Giant cell tumor

S2517/HLA半合致末梢血幹細胞移植後の下部消化管病変/田中健大(岡山大学

病院病理診断科)/

Intestinal transplantation associated microangiopathy(i-TAM) thrombotic

microangiopathy(TMA) /concord

S2518/脾腫瘍 /立山義朗(広島西医療センター研究検査科)/

Plasma Cell Neoplasms/concord

S2519/脾腫瘍/長崎敦洋(中国労災病院病理科)/

Solid-pseudopapillary neoplasm/Neuroendocrine tumor

S2520/肺腫瘍/山本智彦(島根県立中央病院病理組織診断科)/

Alveolar adenoma/concord

S2521/乳腺腫瘍/服部拓也(広島大学医歯薬学総合研究科分子病理)/

Mixed mucinous carcinoma with components of cystic papillary

mucinouscarcinoma and micropapillary variant/Invasive ductal carcinoma

S2522/子宮内容物/倉林 睦(高知大学医学部病理学)/

Epithelioid trophoblastic tumor/concord

S2523/卵巣腫瘍/松本 学(高知医療センター検査診断科)/

Microcystic stromal tumor/concord

S2524/左母指軟部腫瘍/原武大介(広島大学病院病理診断科)/

Digital papillary carcinoma/concord

S2525/腎生検/串田吉生(香川大学医学部附属病院病理診断科)/

Immunotactoid nephropathy/Amyloidosis

S2526/腎腫瘍/板倉淳哉(岡山大学医歯薬学総合研究科病理学免疫)/

Glomus tumor/concord

S2527/前立腺病変/西田賢司(岡山大学医歯薬学総合研究科病理学腫瘍)/

IgG4-related prostatitis/concord

B. 開催予定

1. 第115回学術集会

開催日:平成26年11月1日(土)

世話人:東広島医療センター 万代光一先生

2. 第15回日本病理学会中国・四国支部「病理学夏の学校」

開催日:平成26年8月23日(土)～24日(日)

世話人:山口大学医学部分子病理学講座 伊藤浩史教授

会場:山口県萩市「萩本陣」

C. 県単位の研究会などの開催報告

1. 第55回山陰病理集談会

開催日:2014年5月10日(土)

世話人:島根大学医学部器官病理学 丸山理留敬教授

出席者 27名

740 腎臓病変/Adenovirus nephropathy/松江赤十字病院 高橋卓也

741 肋骨腫瘍/Juxtacortical chondrosarcoma/島根大学医学部器官病理学 石川典由 他

742 乳腺腫瘍/Periductal stromal tumor/島根大学医学部 器官病理学 長瀬真実子 他

743 膀胱腫瘍/Nephrogenic adenoma/島根県立中央病院 病理組織診断科 山本智彦 他

744 リンパ節病変 /Nodal marginal zone lymphoma + dermatopathic lymphadenopathy/浜田医療センター・病理診断科 長崎真琴

745 側腹部皮下腫瘍/Angiomatoid fibrous histiocytoma/鳥取大学医学部分子病理学 桑本聡史 他

746 手背皮膚結節/Histoid leprosy/岡山大学病理学一 板倉淳哉 他

747 後頭部皮膚腫瘍/Cutaneous meningioma/鳥取県立中央病院 病理診断科 中本 周 他

748 皮膚腫瘍/Trichofolliculoma/島根大学医学部病態病理学 天野知香 他

749 皮下腫瘍/Clear cell sarcoma/島根県立中央病院 病理組織診断科 大沼秀行 他

---九州沖縄支部-----

九州・沖縄支部編集委員 大石 善丈

第339回九州・沖縄スライドコンファレンスが下記のように開催されました。

日時:平成26年5月10日

場所:九州大学病院地区 九州大学百年講堂中ホール

世話人:九州大学大学院 形態機能病理 小田義直

参加人数:204名

また同日に九州沖縄スライドコンファレンス世話人会と日本病理学会九州・沖縄支部総会が開催され、以下の報告と議題の承認がなされました。

日時:平成26年5月10日(土)

会場:九大病院地区 百年講堂中ホールI・II

出席者:世話人および会員 80名

1. 役員改選

スライドコンファレンス 庶務

佐賀大学 診断病理 相島 慎一
→ 九州大学 形態機能病理 大石 善丈

2. 平成26年度の開催予定

2014年

340回 7月19日(＋第87回九州病理集談会)九州労災病院
341回 9月6日福岡赤十字病院・九州中央病院共催
342回 11月15日中津市民病院

2015年

343回 1月24日佐賀県医療センター好生館
344回 3月14日宮崎県立延岡病院
345回 5月9日(＋世話人会)九州大学

3. スラコン各機関の出題・投票・出席状況

4. 新規加盟機関、世話人

新規加盟機関

北九州総合病院 世話人 入江 康司
佐賀中部病院 世話人 山崎 文朗
熊本総合病院 世話人 猪山 賢一
帝京大学 福岡医療技術部 世話人 自見 厚郎

世話人交代

天神会新古賀病院 入江 康司 → 徳永 蔵
福岡赤十字病院 中島 豊 → 西山 憲一
済生会福岡総合病院 中島 明彦 → 加藤 誠也

5. 標本セットの配布先について

配布用の標本セット先に製鉄記念八幡病院、熊本医療センターが承認される。

日本病理学会九州・沖縄支部総会

日時:平成26年5月10日(土)14:00-15:30
会場:九州大学 病院地区 百年講堂 中ホール I
出席者:スライドカンファレンス会員 201名

1. 報告事項

1) 第8回初期・後期臨床研修進路説明会(レジナビ)

2) 第3回九州沖縄支部病理学校

(第3回秋の病理学校2013 in 長崎)

3) 各種委員会

業務委員会、若手病理医の会、学術委員会、ホームページ委員会、女性病理医支援窓口、TF委員会、広報委員会

4) 九州沖縄支部スライドコンファレンスとコンサルテーション運用システム

5) その他

(1)第60回日本病理学会秋期特別総会、2014年11月20-21日 沖縄

(2)新専門医制度等について

2. 議題

1) 平成25/26年度九州沖縄支部・役員名簿(案)

2) 平成25年度決算報告(案)

3) 平成26年度予算(案)

4) 第4回九州沖縄支部病理学校(第4回秋の病理学校2014

in 湯布院)

5)その他

(1)九州ブロック初期・後期臨床研修進路説明会について

(2)病理医志望の研修医・学部学生(非学会員)のユーザー登録について

第339回スライドコンファレンス

2014年5月10日 九州大学医学部百年講堂

- 1 / 一般 / 島尾義也 / 県立宮崎病院 / 藤原弘明 / 九州大学口腔病理 / 29 / 男性 / 下顎 / 下顎骨腫瘍 / basal cell ameloblastoma / basal cell ameloblastoma / ameloblastoma, basal cell variant
- 2 / 一般 / 島尾義也 / 県立宮崎病院 / 立川量子 / 福岡大学医学部病理学 / 28 / 男性 / 下顎 / 下顎皮膚腫瘍 / Cutaneous leishmaniasis / Cutaneous leishmaniasis / leishmaniasis
- 3 / 一般 / 島尾義也 / 県立宮崎病院 / 渡辺次郎 / 公立八女総合病院 / 40代 / 女性 / 耳下腺 / 耳下腺腫瘍 / Oncocytic adenomatous hyperplasia / Oncocytic adenomatous hyperplasia / Oncocytoma
- 4 / 一般 / 甲斐敬太 / 佐賀大学病因病態科学 / 野口紘嗣 / 産業医科大学2病理 / 66 / 男性 / 左肺 / 左肺腫瘍 / carcinoid tumor / carcinoid tumor / carcinoid tumor
- 5 / 一般 / 甲斐敬太 / 佐賀大学病因病態科学 / 島尾義也 / 県立宮崎病院 / 63 / 女性 / 左肺 / 左肺腫瘍 / Mixed squamous cell and glandular papilloma / Mixed squamous cell and glandular papilloma / Mixed squamous cell and glandular papilloma
- 6 / 一般 / 田口健一 / 九州がんセンター / 川村和弘 / 大分大学診断病理学 / 77 / 男性 / 肝 / 肝腫瘍 / epithelioid hemangioendothelioma / epithelioid hemangioendothelioma / epithelioid hemangioendothelioma
- 7 / 一般 / 田口健一 / 九州がんセンター / 鍋島篤典 / 産業医科大学2病理 / 39 / 男性 / 腹腔内 / 腹腔内腫瘍 / PEComa, malignant / PEComa / PEComa
- 8 / 一般 / 孝橋賢一 / 九州大学形態機能病理 / 鮫島直樹 / 宮崎大学構造機能病理学 / 70代 / 女性 / 左上腕三頭筋 / 左上腕三頭筋内腫瘍 / atypical lipomatous tumor/well liposarcoma / atypical lipomatous tumor/well liposarcoma / atypical lipomatous tumor/well liposarcoma
- 9 / 一般 / 孝橋賢一 / 九州大学形態機能病理 / 一瀬理沙 / 九州大学形態機能病理 / 61 / 女性 / 右鼠蹊部 / 右鼠蹊部腫瘍 / malignant granular cell tumor / malignant granular cell tumor / malignant granular cell tumor
- 10 / 一般 / 孝橋賢一 / 九州大学形態機能病理 / 平木翼 / 鹿児島大学人体がん病理学 / 46 / 女性 / 右膝関節 / 右膝関節腫瘍 / angiofibroma of soft tissue / angiofibroma of soft tissue / solitary fibrous tumor
- 11 / 一般 / 山田壮亮 / 産業医大2病理 / 吉河康二 / 別府医療センター / 60代 / 女性 / 小脳 / 小脳腫瘍 / Dysplastic gangliocytoma of cerebellum / Dysplastic gangliocytoma of cerebellum / Dysplastic gangliocytoma of cerebellum
- 12 / 一般 / 山田壮亮 / 産業医大3病理 / 黒濱大和 / 長崎医療センター / 76 / 男性 / 左こめかみ / 皮膚腫瘍 / endocrine mucin producing sweat gland carcinoma / endocrine mucin producing sweat gland carcinoma / poroma/dermal duct tumor

病理専門医会会報は、関連の各種業務委員会の報告、各支部の活動状況、その他交流のための話題や会員の声などで構成しております。皆様からの原稿も受け付けておりますので、日本病理学会事務局付で、E-mailなどで御投稿下さい。

病理専門医会会報編集委員会:村田哲也(委員長)、望月 眞(副委員長)、深澤雄一郎(北海道支部)、長谷川剛(東北支部)、九島巳樹(関東支部)、森谷鈴子(中部支部)、桑江優子(近畿支部)、串田吉生(中国四国支部)、大石善丈(九州沖縄支部)

日本病理学会コンサルテーションシステム 謝辞

平成 25 年度日本病理学会コンサルテーションシステムにおきまして、ご尽力を賜りましたコンサルタントの先生方に心より感謝申し上げます。コンサルテーションをお引き受けくださった先生方を以下に記載させていただきます。

平成 26 年 6 月吉日
一般社団法人 日本病理学会
理事長 深山 正久

相島慎一	秋山太	新井栄一	新井富生	伊古田勇人*	石川雄一	石田剛
泉美貴	伊藤雅文	今北正美	今村好章	入江準二	岩田純	岩渕三哉
植田初江	大内知之	大倉康男	大島孝一	大林千穂	岡輝明	小川郁子
尾島英知*	小田義直	小幡博人	覚道健一	鹿毛政義	加藤良平	亀田典章
亀山香織	菅野祐幸	岸本宏志	清川貴子	九嶋亮治	黒住昌史	黒田直人
小島勝	後藤浩*	小西英一	小森隆司	桜井孝規	佐々木惇	佐々木恵子
笹島ゆう子	笹野公伸	定平吉都	塩見達志	澁谷誠	清水道生	白石泰三
城謙輔	新宅雅幸	菅井有	鈴木正章	砂川恵伸	関邦彦	仙波伊知郎
園部宏	高田隆	竹内真	竹下盛重	立山尚	田中正則*	田中祐吉
田丸淳一	薦幸治	津田均	土屋眞一	都築豊徳	堤寛	手島伸一
寺崎泰弘*	長尾俊孝	長坂徹郎	中島収*	中嶋安彬	中島孝	長嶋洋治
名方保夫	中谷行雄	中沼安二	中峯寛和	中村栄男	中村眞一	中村直哉
中山雅弘	二階堂孝	仁木利郎	野口雅之	野島孝之	長谷川匡	林暢紹*
久岡正典	比島恒和	平戸純子	蛭田啓之	廣川満良	廣島健三	廣瀬隆則
福永真治	藤林真理子	本間慶一	増田しのぶ	松野吉宏	松原四郎	松本俊治
三上芳喜	三上修治	三橋智子	湊宏	元井亨	森谷鈴子	森永正二郎
森谷卓也	八尾隆史	安田政実	谷田部恭	柳井広之	柳澤昭夫	山口岳彦
山鳥一郎	横尾英明	横山繁生	吉川洋	吉田朗彦	吉野正	若狹研一
若狹朋子*	渡辺みか					

(敬称略)

なお、* (アスタリスク) は、ご協力いただいた先生方のうち当該年度の登録コンサルテーションボード以外の方のご芳名を示しております。